

市道真名井神社線整備事業に伴う

大坪遺跡発掘調査報告書 II

2008年6月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

市道真名井神社線整備事業に伴う

大坪遺跡発掘調査報告書 II

2008年6月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

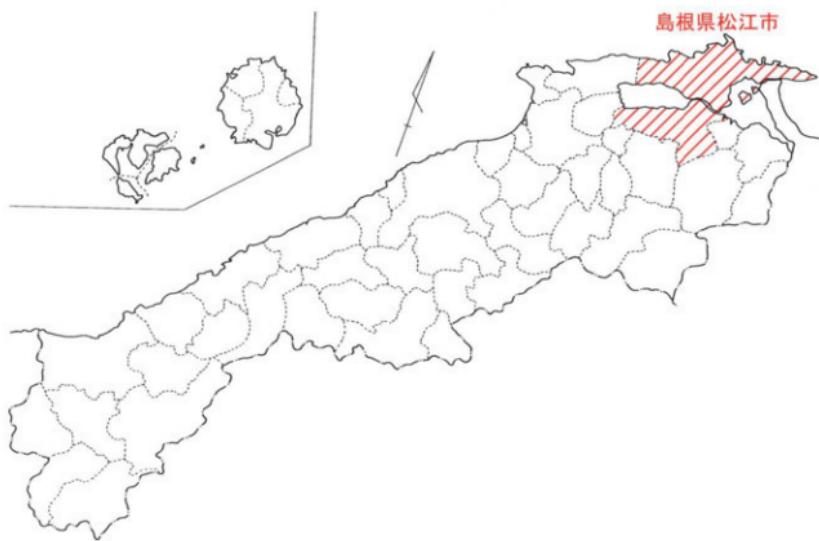
1. 本書は、松江市教育委員会および財団法人松江市教育文化振興事業団が平成19（2008）年度に実施した、市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書は、松江市（土木課）から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 発掘調査の組織は以下のとおりである。

依頼者	松江市（土木課）	
事業主体者	松江市教育委員会	
事務局	教育長	福島 律子
	理事	友森 勉
	文化財課長	古岡 弘行
	調査係長	飯塚 康行
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団	
	理事長	松浦 正敬
	専務理事	中島 秀夫
	事務局長	松浦 克司
	埋蔵文化財課長	広江 真二
	課長補佐	錦織 慶樹
調査者	副主任	徳永 隆
	調査補助員	永田 正人
	調査補助員	大西 総司

4. 石器については、鳥根県埋蔵文化財調査センター丹羽野裕氏に指導を仰いだ。また、勝部昭氏には周辺の調査状況についてご教示いただいた。
5. 平成11年度から平成13年度にかけて実施した、本遺跡に関する調査成果については、平成14年9月に報告済みである。
6. 掘岡中の方位は旧測地系の第Ⅲ座標系X軸方向を指しており、磁北より $7^{\circ}12'$ 、真北より $0^{\circ}32'$ 東の方向を指している。また、調査に使用した座標は、過去の調査との関連から旧測地系を使用した。
7. 出土遺物は、松江市教育委員会文化財課で保管している。
8. 遺物の整理、実測及び浄書は、徳永、大西、小原が行い、執筆は徳永が行った。また、遺物の撮影及び本書の編集は中尾が行った。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	3
IV まとめ	15



I 調査に至る経緯

松江市南東部の意宇川流域にある意宇平野一帯は、古くからの条里制跡がよく残り、国史跡として指定されている。

平成9年度において、地元自治会から市道真名井神社線（もとは真名井神社の参道）の松並木を復元して欲しいという陳情書が提出された。これを受け、松江市が市道拡幅を含めた松並木の整備計画を策定したが、当該地は国史跡出雲国府跡の指定地西端にあたることから、文化庁および県教育委員会との協議の結果、市道西側のみを拡幅することとなった。しかし、史跡指定地外にも古代道等の国府跡関連の遺構が存在する可能性が推定されたため、事前に発掘調査を実施することになった。

調査は、圃場ごとに北から1~15区の調査区を設定し、平成11年度から平成13年度にかけて、数区画ごとに断続的な調査を実施し、弥生時代から古代にかけての遺物、遺構を多数検出している。

今回は最終調査区となる13区の調査を実施し、大坪遺跡の詳細を明らかにしようとするものである。



第1図 大坪遺跡調査位置図

II 位置と歴史的環境

真名井神社の参道は、松江市山代町と大草町にまたがる、南北約340m、幅4mの市道で、国指定史跡となっている「出雲国庁跡」の西端に位置する。

周辺には法華寺前遺跡（1）、間内遺跡（2）、上小紋遺跡（3）、向小紋遺跡（4）など、繩文時代から弥生時代の土器の散布地が知られている。

意宇平野の周辺や丘陵には多数の古墳が所在し、古墳時代多くの遺跡がある。平野部には、国指定史跡となっている大型の古墳が点在する。一辺42mの方墳である大庭鶴塚古墳（5）、全長90mの前方後円墳である山代二子塚（6）、一辺45mの山代方墳（7）がある。南部の丘陵には、東百塚山古墳群（8）、西百塚山古墳群（9）、安部谷横穴群（10）などの群集墳や横穴群が所在する。

奈良時代には、出雲国守跡地（11）、出雲国分寺跡（12）、山代郷正倉跡（13）があり、いずれも国指定史跡となっている。

中世以降も下黒田遺跡（14）や出雲國造館跡（15）など所在し、明治時代に至るまで出雲国を中心地となっていた地域である。



第2図 周辺の遺跡分布図

III 調査の概要

1. 調査の経過と方法

調査区は、南北約17mの圃場内に、市道の拡幅予定範囲となる東西約10m（道路端からは法面と側溝、畔を残す。）の範囲で設定した。調査面積はおよそ160m²である。

本調査は、まず、耕作土を重機により取り除き、以下人力で耕作土直下からの遺物包含層を掘削し、遺物を採取しつつ、遺構が検出される面まで掘り下げた。遺構検出後は、順次遺構名を付し、10分の1で平面図、土層断面図を作成した。遺構の位置関係はトータルステーションを用い測量、整合を行っている。

調査開始当初から悪天候が続き、2月上旬には近年にない積雪が数日の間、調査区を埋め尽くすなど、調査の進展を妨げた。結果、2月末に終了予定であった現地調査を3月半ばまで延長することとなった。

また、遺構面を形成する基盤上層がしまりの悪い砂質土であり、遺構の覆土中にその砂質土が他の泥との混濁もほとんどなく流れ込んでいることが多く、検出される遺構は淡い慘みのようにしか見えず、遺構の検出が容易ではなかった。

3月13日(木)に島根県教育委員会、松江市教育委員会による現地指導会を実施し、住居跡は弥生中期末から後期にかけてのもので、この周辺では知られていない事例であり、前回の調査を含めて当地の弥生時代の状況を検討する必要があること、包含層の遺物の多くは古代・中世のものであり、この頃までに当地に条里が敷かれた可能性があること等の指導を受けた。また、後日、時期不明であった打製石器が縄文時代以前にまさかのぼる可能性についてもご教示いただいた。

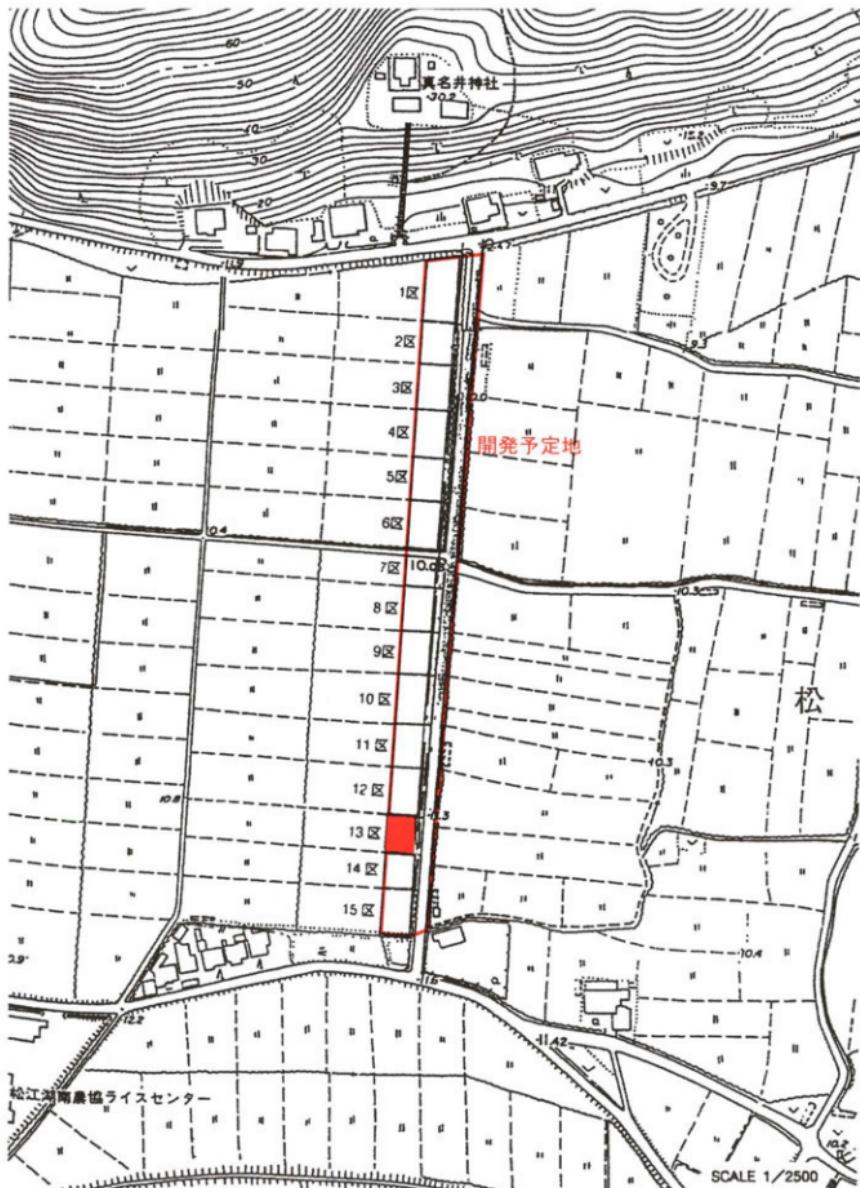
指導会終了後、遺構の記録、遺物の取り上げ等を実施し、現地での調査を終了した後、耕作可能な状況に埋め戻している。

2. 調査の結果

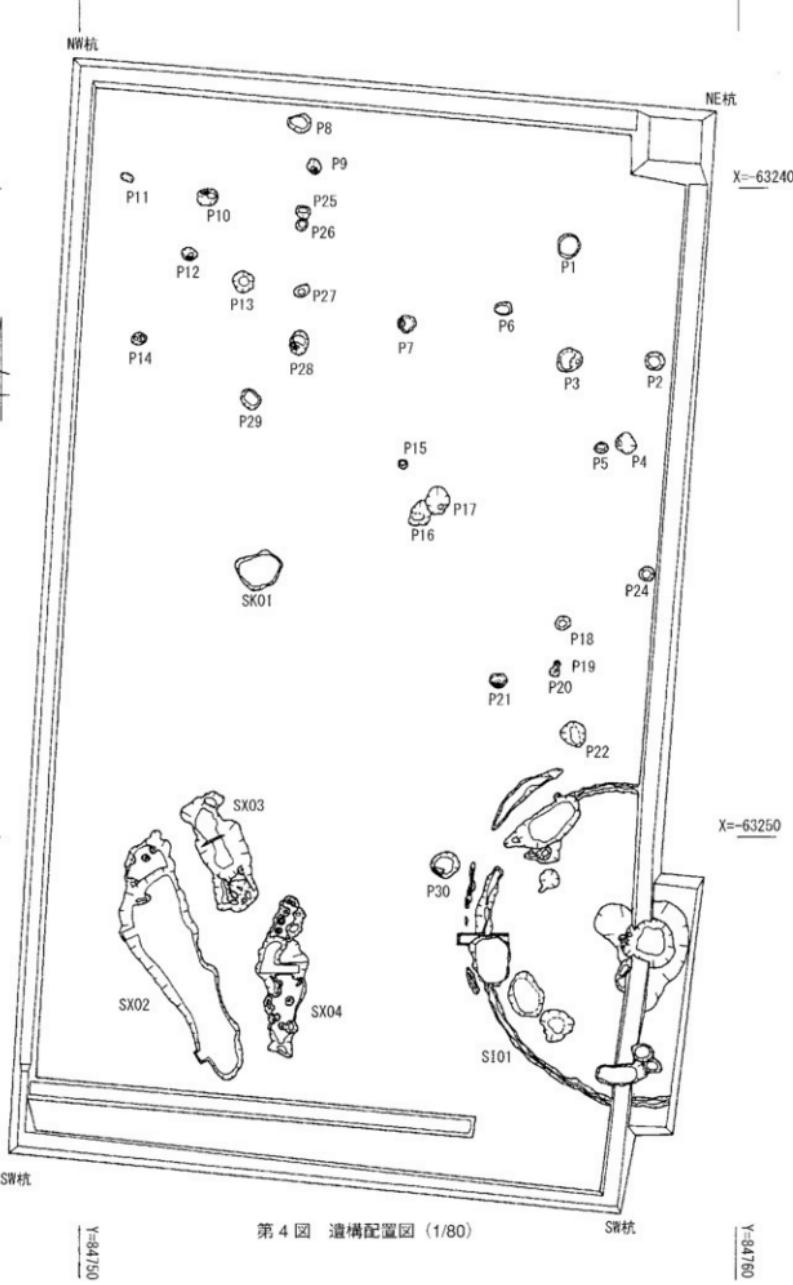
(1) 層序 (第5図)

耕作土を剥ぐと調査区全体に灰色粘質土（第6層）、灰白色粘質土層（第7層）が堆積している。前回の調査でも遺跡全体に確認できており、古墳時代から古代の遺物を多く含む。その包含層直下の暗茶褐色砂質土（第8層）、淡灰褐色砂質土（第9層）上面からは弥生時代中期からの遺構が検出された。以下30~40cmの厚さで砂質土壤が堆積しており、これらの堆積活動が安定した時期に遺構が形成されたものと考えられる。

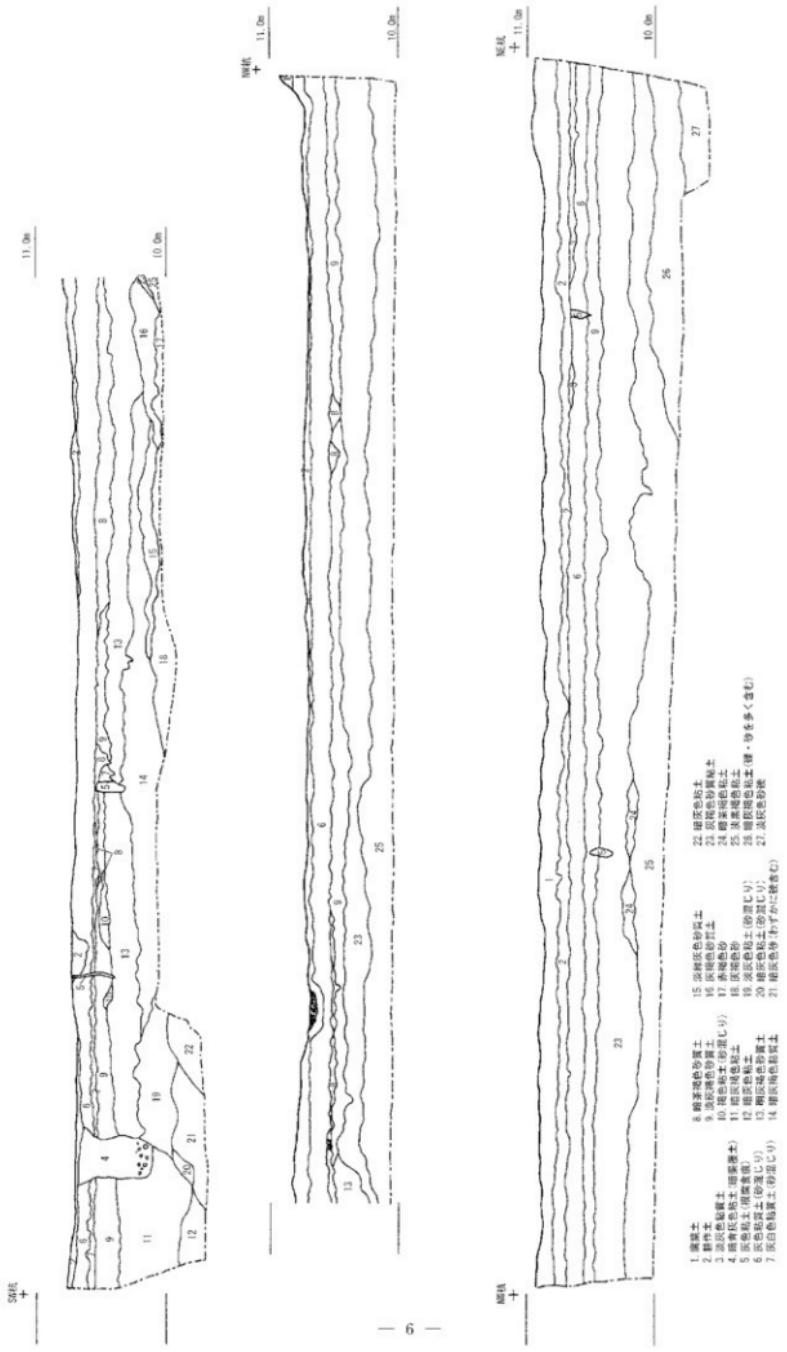
他の調査区でも同様の砂質土壤上面から遺構が検出され、弥生時代前期の遺物を含む溝も確認されている。ただし、弥生時代の遺構面から間断なく古墳時代以降の包含層が堆積していることや、検出された溝が底面付近の浅いものであったことなどから、遺構面が多少の削平を受けている可能性がある。また、遺構の基盤層である砂質土層は縮まりが悪く、比較的粗い粒子で構成されるため、



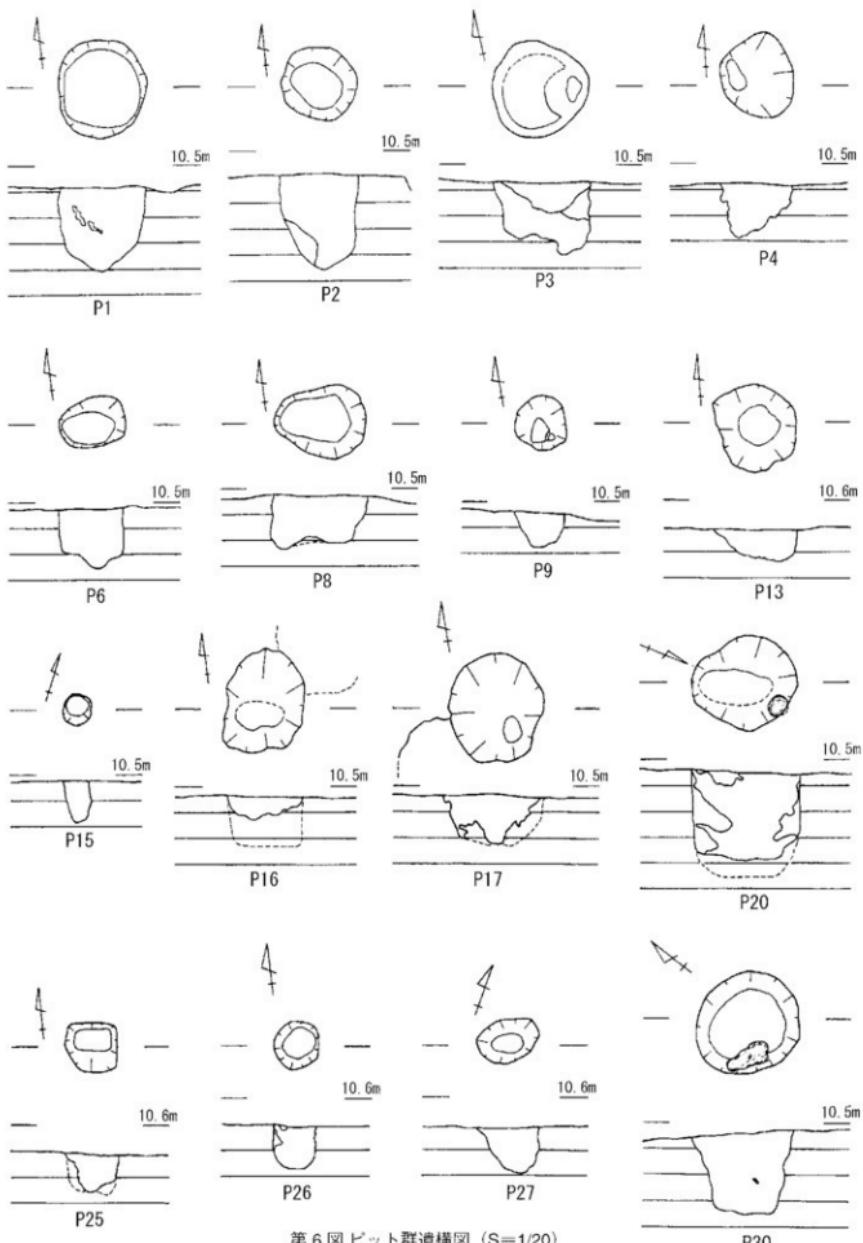
第3図 大坪遺跡調査区配置図 (1/2500)



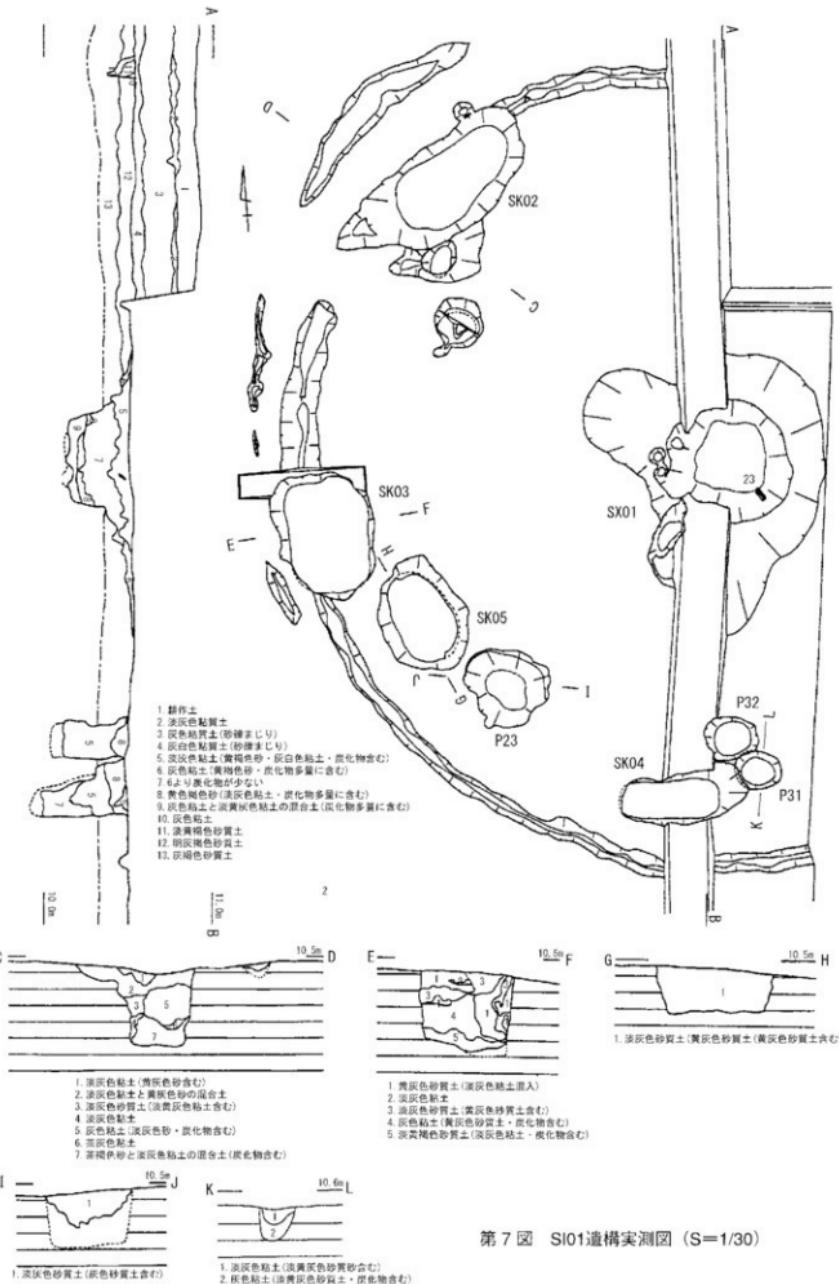
第4図 遺構配置図 (1/80)



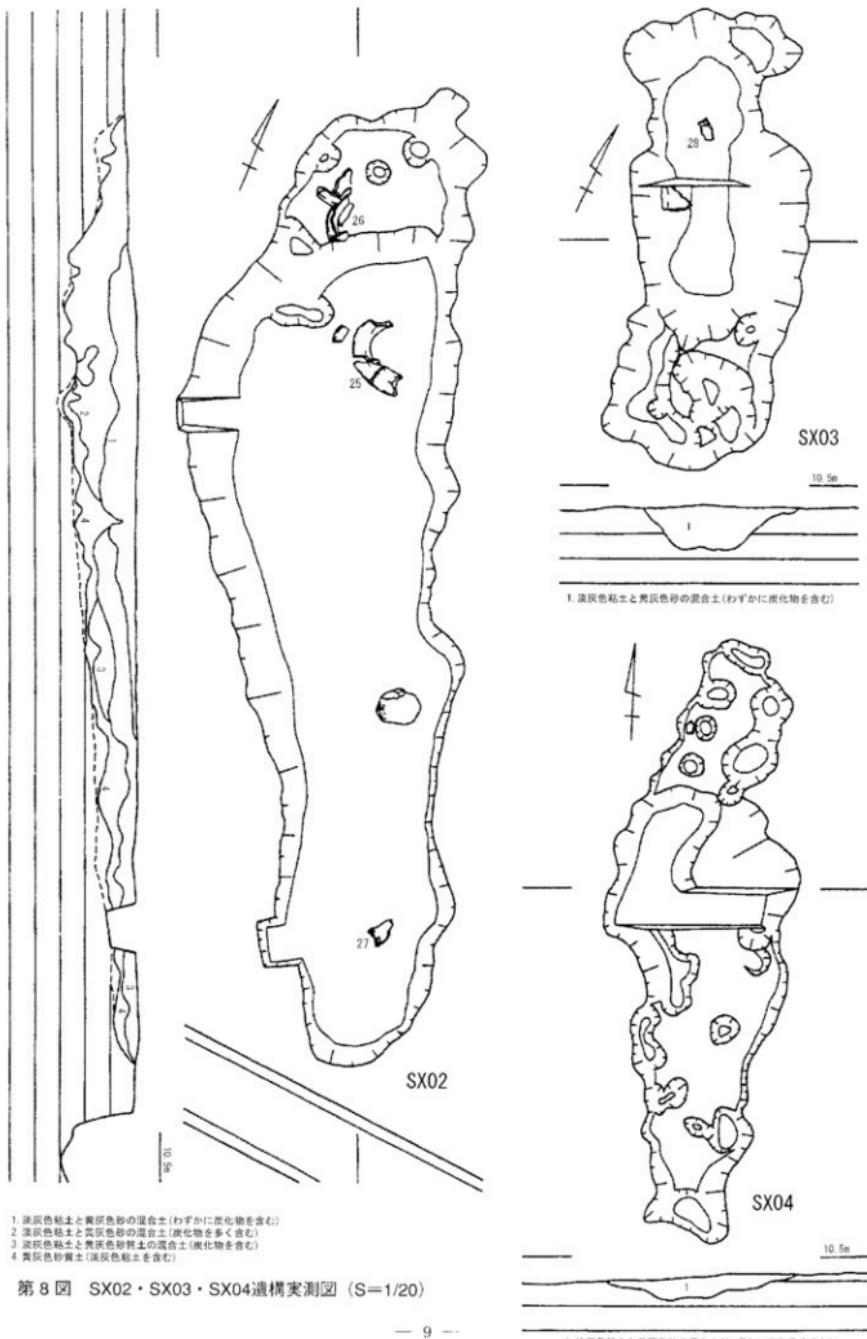
第5図 調査区西壁・北壁土壌断面図 (1/40)



第6図 ピット群造構図 (S=1/20)



第7図 SI01造構実測図 (S=1/30)



第8図 SX02・SX03・SX04遺構実測図 (S=1/20)

大雨等で冠水するようなことがあると土壤表面の砂が流動することが推測されるもので、遺構の検出を困難にしている。

砂質土壌の堆積層以下では無遺物層の粘土層、砂層と堆積しており、標高10m以下では疊層が確認され、意宇川によって形成された氾濫原の広がりが確認できた。

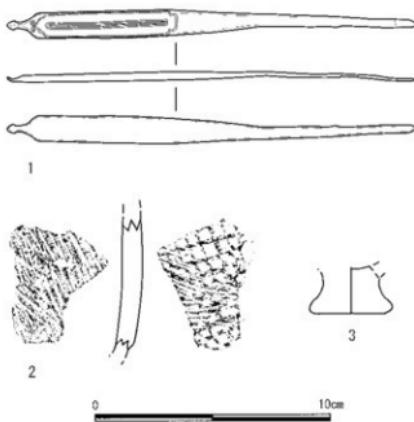
(2) 包含層

耕作土直下に堆積する灰色粘質土層（第6層）、灰白色粘質土層（第7層）中に、須恵器小片を中心として多数の遺物が検出された。包含層は厚さが20cm程度で調査区全体にほぼ水平に堆積していた。遺物の多くが小片で磨耗が著しく、流れ込んだ遺物という印象を受けるものであった。また、調査指導時に、甕の破片が少なく生活感に欠けるような器種構成であるとの指摘も受けている。

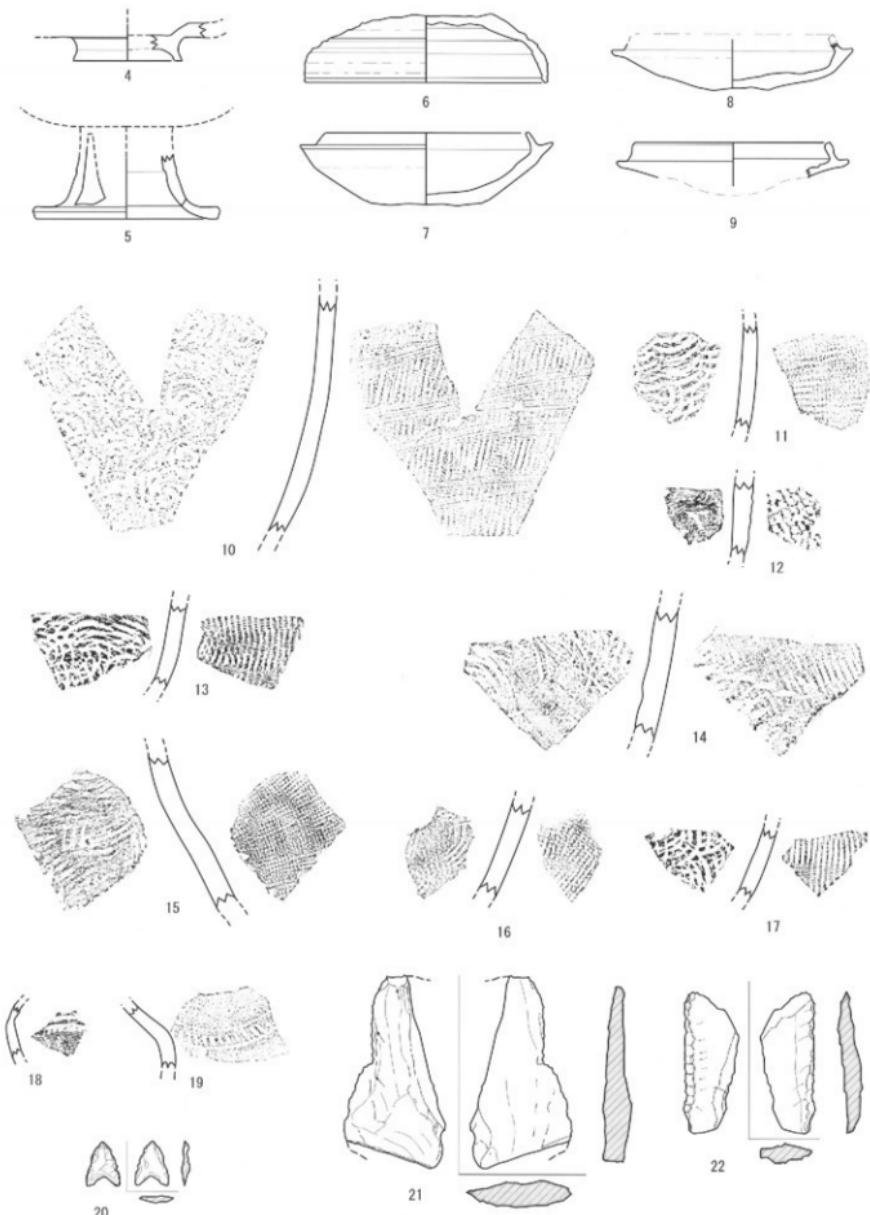
(3) 包含層出土遺物（第9・10図）

1は銅製の笄（こうがい）で、長さ17.3cm、肩部幅1.1cm、厚さ（最大部）0.4cmを測るものである。端部には耳搔きがついており、胴部の片面には線刻による装飾が見られる。全体に鏽が覆っており、象嵌等はみられない。2は中世須恵器の小片と考えられるもので、表面は格子状のタタキ目が残り、裏面は粗いハケメが観察される。3は柱状高台付环と考えられる。以上が中世の遺物と考えられる。4～20は須恵器片である。4は須恵器环の底部で高台が付くものである。5は須恵器高台環で透孔をもつ。6は須恵器蓋環の蓋で、ほぼ完形で出土した。頂部外面は回転ヘラケズリが施されている。7～9は須恵器環でいずれも内傾して短く立ち上がるカエリをもつ。10～17は須恵器壺の体部片と思われるものである。いずれもタタキ目が残る。18は須恵器「聰」の頸部とみられるもので、波状文が施される。4は古代、5～18は古墳時代から古代のものと考えられる。時期が特定できるもので古代から中世のものは破片数点であり、多くは古墳時代後期のものと考えられる。20～22は石器である。20は凹基式の打製石鎌で、石材は不明であるが、暗灰色を呈するものである。21は打製の石器片で、石鎌の一部か。以上は弥生から縄文時代のものと推定される。22はスクレイバーで、横長状の剥片の末端側に加工を施し刃部をつくりだしている。瀬戸内技法に類似するが、表裏で打点のズレが見受けられ、縄文時代の古い段階から旧石器時代終末のものと考えられる。

以上の遺物から、包含層出土遺物の時期幅は旧石器時代から中世までの長期間にわたるもので、



第9図 出土遺物実測図①



第10図 出土遺物実測図②

時期を特定できない小片が多いが、古墳時代後期から古代の須恵器片が多い。摩耗の度合い等から二次的な流入もしくは造成により形成された可能性が考えられる。

(4) ピット群（第6図）

調査区北半に集中して、ピット群を検出した。ただし、形状が不整形なものが多く、植物による搅乱痕である可能性が高いものが大半であった。形状の整ったものは、P1、P2、P20、P30があるが、建物を復元する並びは確認できなかった。P1は直徑約35cmで検出面からの深さは約30cmである。P2は直徑約30cmで、検出面からの深さは約35cmである。遺物は土師器の碎片数点が出土している。P20は直徑約40cmで、検出面からの深さは約35cmである。遺物は土師器の碎片数点が出土している。P30は直徑約40cmで、検出面からの深さは約30cmである。遺物は土師器小片1点が出土している。P1とP2、P20とP30は覆土も類似しており、それぞれ関連性がありそうであるが、確証を得ない。その他、P4から須恵器片、P17から土師器片が出土している。

(5) ピット群出土遺物（第10図18・19）

20は須恵器「壺」の肩部片である。2条の沈線の間に波状文が施されている。その他、ピット内から土師器の小片が出土しているが、いずれも摩耗の著しい小片のみで、図化困難なものであった。

(6) 住居跡（SI01）（第7図）

調査区南東部分で検出された住居跡で、円形のプランの西側半分だけが調査区にかかった形で検出された。検出当初は、炭化物を大量に含む中央土坑1基（SX01）とそれを囲むように調査区外に伸びるアーチ形の周溝プランがぼんやり見えるように検出された。しかし、住居跡の柱穴かと思われた2箇所を断ち割ると、柱穴にしては大きな楕円形の土坑（SK02、SK03）になり、また、周溝跡もあまりに不鮮明な検出状況であったため、住居跡遺構の可能性を一時排除して掘り始めた。その後、楕円の土坑がSX01を等距離で放射状に取り巻くこと、さらにその軌道上にもう1基の楕円の土坑（SK04）が検出されたこと、再度の精査でやはり周溝が検出できたこと等により、住居跡として改めて認識することとなった。そのため、周辺土坑を中心とした周溝と周溝に沿って断ち切る等の調査を実施できなかった。

なお、中央土坑（SX01）と土坑1基（SK04）が調査区外に伸びていることが確認されたため、一部調査区を東側に拡張して調査を実施している。

中央土坑（SX01）は、約1.5mの不整形な浅い窪みの中央に、一边約70cm、深さ約35cmの隅丸方形の土坑が掘られている。炭化物が外周の浅い窪み（第6層）と中央の深い土坑の深部（第8層）に多量に含まれており、住居の炉跡であったものと思われるが、焼土面は検出できていない。

周辺の土坑は、中央土坑の北からSK02、03、05、04と検出された。SK02とSK03は規模、深さ、覆土ともに類似性が強く、またSK04も規模は小さいものの、深さ、覆土が前述2基の土坑と類似しており、3基は等間隔で中央土坑（SX01）を中心に配置されたものであることから、住居に伴う柱穴

であったものと推測される。

なお、一般的な柱穴よりかなり大きい印象を受けるこの3基の土壙については、土層観察からは確認できなかったが、住居の建て直し等に伴う柱の抜き取り穴である可能性が想定される。

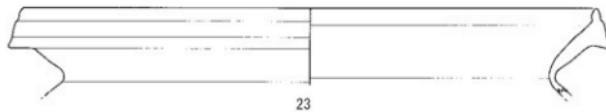
SK05は比較的浅く、位置も他の土坑の並びからも少しずれるようであり、あるいは建て替えによる時期の違う住居関連の土坑である可能性がある。

その他、住居関連のピットが3基確認された。P23は直径約50cmで検出面からの深さは約20cmである。P31は直径約28cmで検出面からの深さは約20cmである。P32は直径約35cmで検出面からの深さは約38cmである。P23は浅く、不整形であるため根柢である可能性が高い。P31はSK04、P32を切って作られており、P32、SK04の前後関係は不明であるが、P31がもっとも新しく掘られたと考えられる。ほぼ同位置に3基の柱穴跡があり、住居の建替えが複数回あったことが伺える。なお予断を許すのであれば、SK02、SK03も同様に密集して土坑が掘られた結果、現状のような土坑状を呈したものと考えられる。

周溝は、SK02、SK03に重なりながら、中央土坑の中心点から半径約2.5mの円を描く溝と、その外周もしくは中心をわずかに北西にずらしたような、途切れ途切れの溝跡の2本が検出された。両溝とも覆土は基盤の砂質土とほぼ同様の砂質土で埋没しており、わずかに、灰色の粘土が混ざる程度で、検出、掘削が困難なものであった。また、溝の底部も凹凸があることから、杭もしくは板状のものを打ち込んだような痕跡である可能性も考えられる。

(7) 住居跡出土遺物（第11図）

遺物は中央土坑と周辺土坑内から数片の弥生中期～後期の遺物が出土している。23はSX01から出土したもので、複合口縁甕の口縁部片である。わずかに内傾する口縁部をもち、口縁下端は垂下する。摩滅が著しく、明瞭ではないが、数条の凹線がめぐるようである。24はSK03から出土したもので、23と同様甕口縁部片である。凹線の痕跡が見える。その他、小片ではあるが、複合口縁甕の口縁部片で、口縁の立ち上がりは短く内傾し、斜行文がめぐるものもあった。時期については、弥生



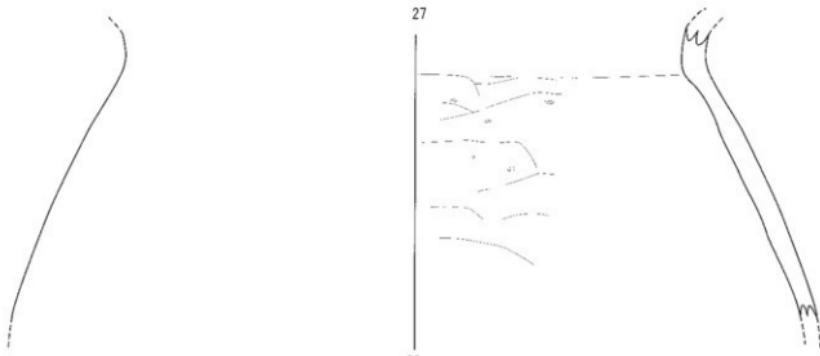
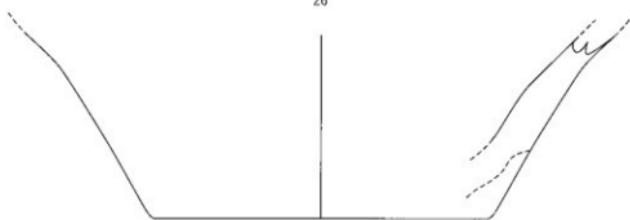
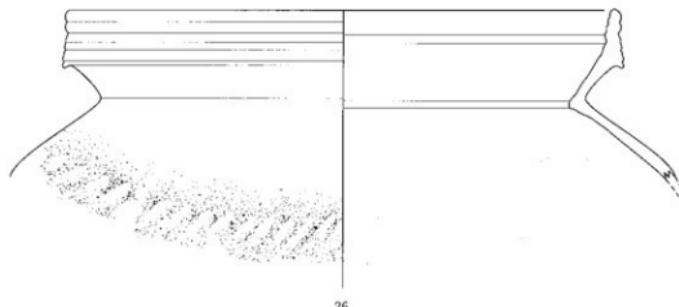
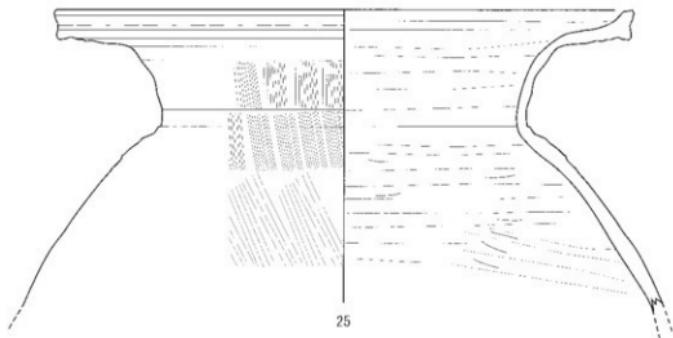
23



24

第11図 出土遺物実測図③





第12図 出土遺物実測図④



中期末から弥生後期初頭と思われるもので、検出した遺物は少數であるが、住居跡も同時期のものと推定される。

(8) 不明遺構（第8図）

調査区南西部で3基の浅く長い不整形土坑が検出された。

SX02は長軸約4m、短軸約1.1m、深さが中央で約0.3mの不整形土坑で、比較的多くの炭化物と弥生中期から後期の遺物を含む。

SX03は長軸約1.9m、短軸約0.7m、深さが中央で約0.2mの不整形土坑で、弥生土器片が出土している。

SX04は長軸約2.5m、短軸約0.8m、深さが中央で約0.15mの不整形土坑で、土器片1点が出土した。

いずれも底部の凹凸が激しく、土坑というより窓程度の深さのものであるが、調査区南西部に集中し、大量の炭化物と比較的大型の土器片を含むなど、何らかの遺構であるものと考えられる。

(9) 不明遺構出土遺物（第12図）

25～27はSX02から出土したものである。25は複合口縁甕で、ほぼ直立する頸部から大きく開く口縁に短く立ち上がりがつくもので、外面は全体にハケメ調整が施され、内面は頸部直下からケズリ痕が残る。26も複合口縁甕で、頸部は「く」の字に屈曲し、内面頸部以下はケズリ痕が残る。外面は全体に磨耗し明瞭ではないが、肩部に列点文がめぐり、口縁部には数条の凹線が施される。27は甕底部片で、底外面には、わずかにハケメが残る。28はSX03から出土したもので、甕の頸部から胴部にかけての破片である。SX04からも土器片が出土したが図化できなかった。遺物の時期は弥生後期初頭のものと思われる。

IV まとめ

今回の調査は、平成11年度に始まった南北に約320m、東西に約10mという細長い調査範囲の最終の区画の発掘調査となった。調査前に予想された条里制に関連する遺構は、全区画を通じて検出されなかつたが、以前の調査を含めて、古代の木簡や、弥生前期から始まる遺構の存在が明らかになるなど、貴重な資料が得られた。特に今回、弥生時代の住居跡が検出されたことは、当地域で不明であった弥生時代からの集落の存在が推測される等、出雲国府跡関連時期以前の歴史的環境に新たな知見を加える調査になったものと考える。

図版

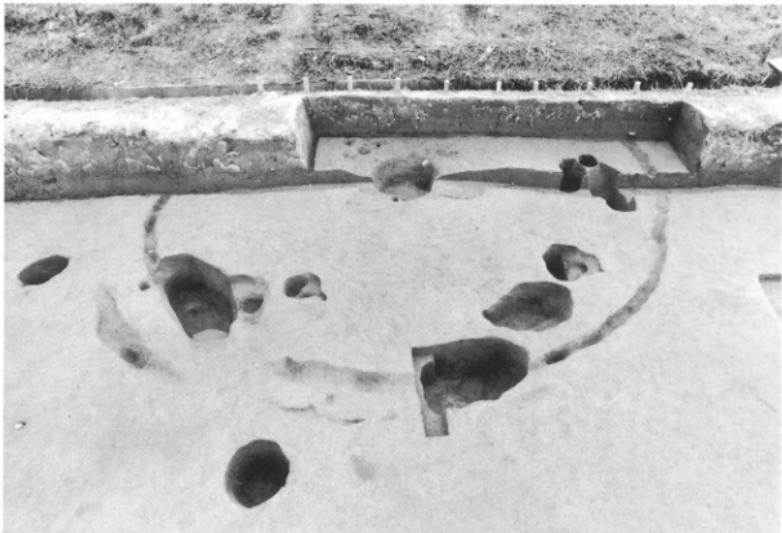
図版1



大坪遺跡（13区）全景（南から）



調査区北側ピット群完掘状況（南から）



住居跡完掘状況（西から）

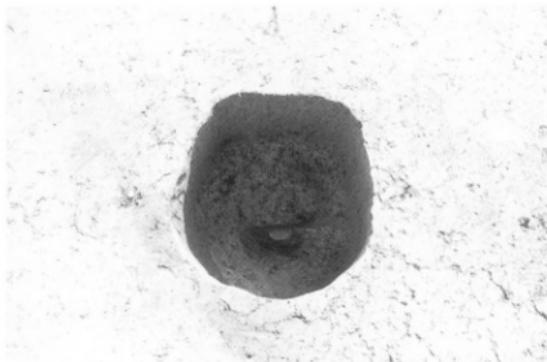


不明遺構完掘状況【奥：SX02、前右：SX03、前左：SX04】（北東から）

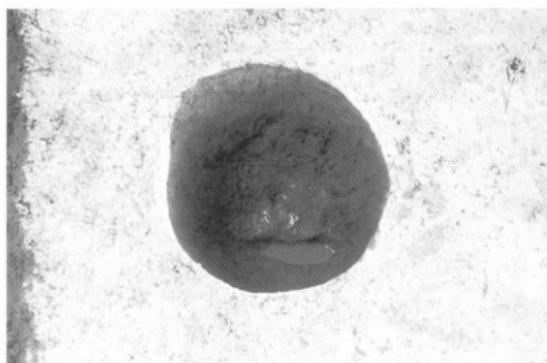
図版3



調査区北壁土層堆積状況
(南東から)



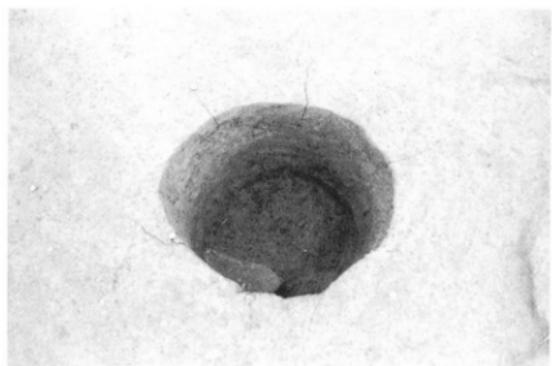
P1 完掘状況



P2 完掘状況



P20完掘状況



P30完掘状況



SI01完掘状況
(南西から)

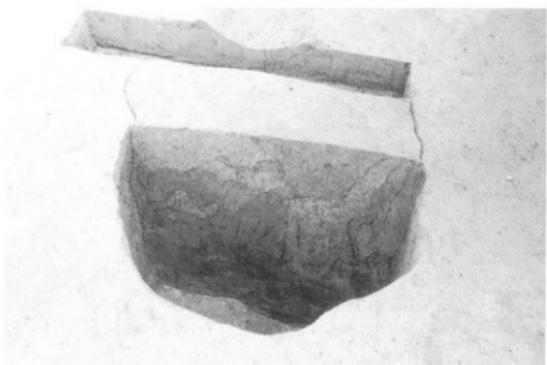
図版5



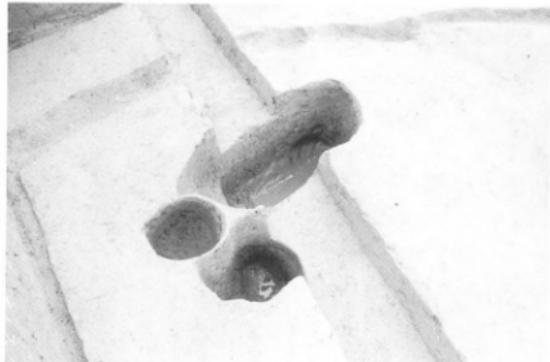
SI01中央土坑【SX01】
土層堆積状況
(西から)



SI01柱穴土坑【SK02】
周溝土層堆積状況
(北東から)



SI01柱穴土坑【SK03】
土層堆積状況
(南西から)



SII01柱穴土坑
【奥:SK04、中央:P31、前:P32】
(北東から)

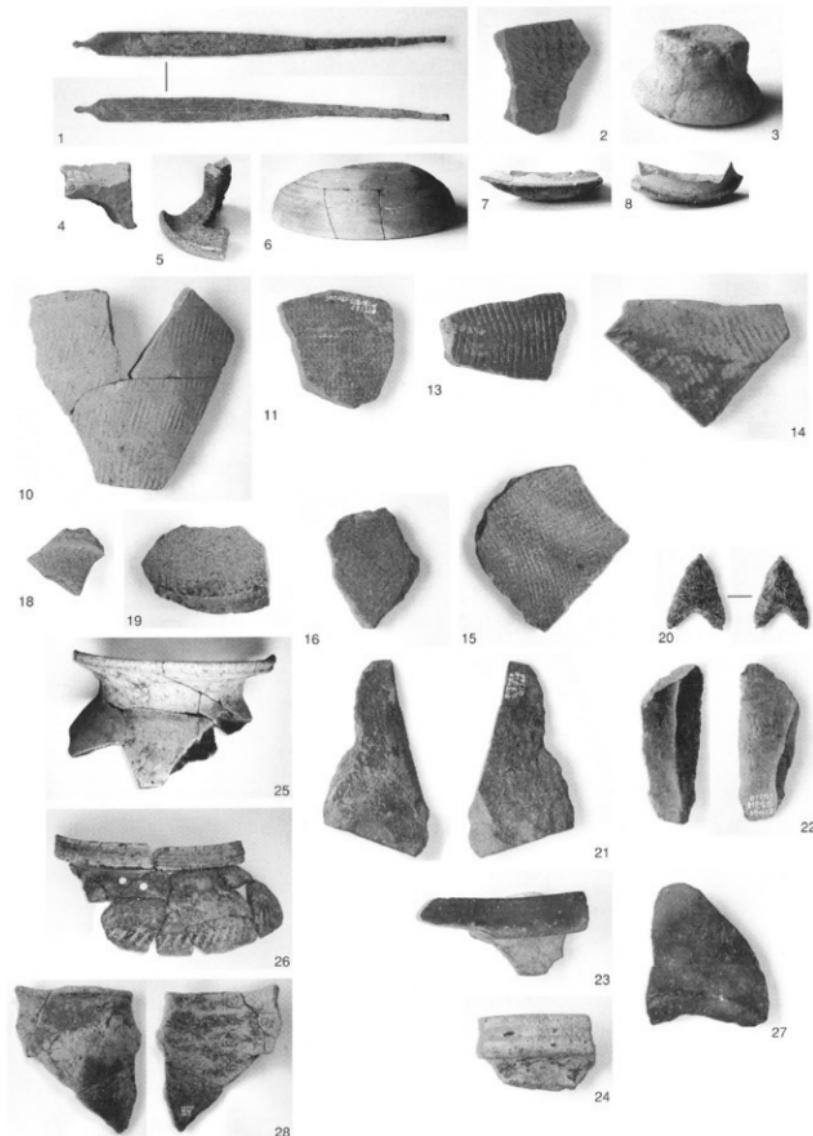


SX02土層堆積状況
(北西から)



SX02遺物出土状況
(北西から)

図版7



大坪遺跡出土遺物

報告書抄録

フリガナ	シドウマナイジンジャセンセイビジギョウニトモナウオオツボイセキハックツチョウサホウクショニ						
書名	市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書Ⅱ						
副書名							
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第115集						
編集者名	徳永 隆・中尾秀信						
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地	島根県松江市末次町86番地 TEL 0852(55)5284 島根県松江市島根町加賀1263-1番地 TEL 0852(85)9210						
発行年月日	2008年6月30日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大坪遺跡	島根県	32201	35°25'37"	133°06'01"	1999.11. 1 ~ 2000. 2.18	940m ²	道路整備
	松江市				2000.10.25 ~ 2001. 1.30	1318m ²	
	山代町	B096	35°25'46"	133°5'51"	2008. 1.16 ~ 2008. 3.14	160m ²	
	大草町						
所取遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
大坪遺跡 (13区)	散布地	弥生時代 古墳時代	竪穴式住居		弥生式土器 上 師 器 須 恵 器		

市道真名井神社線整備事業に伴う
大坪遺跡発掘調査報告書 II

2008年6月

発行 松江市教育委員会
財團法人松江市教育文化振興事業団
印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東長江町